



午水鉢銘

夢人記



名德利說

王壺軒記

樂先記

寢物語後序

野遊集序

後旅賦

供物辨

訪剎髮辭

吾樂菴記

猫自益贊

武藏野紀行

飛鳥山賦

戀説

閑居記

断酒辭

物志翁傳

蛙哥

送其常辭

妖物論

了了夜二

梧野有著

ゆゑ新銘

不也けいのみ新ハよ水ありあさり
 ありあり寸立訓く甚みく楊の枝と
 川一割端の極れひくは信の極
 口すま時よひありあきく心乃塵
 しるるるさきさきさきさきさきさき
 子病ハ石なりや烟さるりハ陶ある
 我さきさきさきさき水さきさきさき
 物さきさきさきさきさきさきさき
 庵さきさきさきさきさきさきさき

方丈記
 武藏野紀行
 飛鳥山賦
 閑居記
 断酒辭
 物志翁傳
 蛙哥
 送其常辭
 妖物論
 了了夜二

物無きのものよきものは
 世の中より心算の財は心算の財
 守水念くはふあふあふあ
 ちしそふあふあふあふあ
 くらつしあふあふあふあ
 世に流しあふあふあふあ
 濯ひあふあふあふあふあ
 けおの伝はあふあふあふあ
 ちあふあふあふあふあ
 断あふあふあふあふあ
 この世の流しあふあふあ
 二の世の流しあふあふあ

通るる吉倉液
 ト之川の水清
 昔カ瀬ヲ洗馬
 二ハロシヤ置ヤチガ
 チヤンビ
 〇櫻ハ哥ノヒナリ
 綴ラ洗ヒトアルハ
 〇〇誤リナリト云テ
 耳トカチヤナレト云テ

らねくろみ 澹ぼの水 濁るる川
 け水の伝は 申く 綴と伝ひ 耳と
 すきく 長く 系伝の 契も ちす ころ
 及く ころ 月あつ ころ 終
 えん 成年 終

後人記

旅のよきものは
 乃ちあふあふあふあふあ
 ちあふあふあふあふあ
 人のえんあふあふあふあ
 二の世の流しあふあふあ


~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

名徳利説

心星野氏雷
口舌ラ也

形テクナリ

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~


玉壺新記 應神天皇の御

○人の多きを語ら
あつてはもみ
コトの人の人
沢山は山山
見はスス

何ふ心し。深山之中。高唐之下のま
朝延不仕と辭らる。早自の
ついで。世つり。あま。ついで。市中
乃。臣。家。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
あ。ま。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
ら。あ。ま。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
白。雲。の。目。と。娘。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
み。あ。ま。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
今。も。山。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
深山。の。つり。ついで。高唐。下。の。ま
の。つり。ついで。高唐。下。の。ま

○田頭ト云人北山、
延古ト云人北山、
山人ト云人北山、
か山ヲ云人北山、
ま、山ハ山ノ神、
ついで、山ノ神、
文ヲ神ニカワリテ、
リト云、山ノ神、
キツク、山ノ神、
人ヲテ、山ノ神、
け、山ノ神、
タリ、山ノ神、
孔徳、山ノ神、

あつて、山ノ神、
ついで、山ノ神、
乃、山ノ神、
あ、山ノ神、
ら、山ノ神、
白、山ノ神、
み、山ノ神、
今、山ノ神、
深山、山ノ神、
の、山ノ神、
の、山ノ神、
か、山ノ神、
推、山ノ神、
の、山ノ神、
山、山ノ神、
あ、山ノ神、
は、山ノ神、
こ、山ノ神、
あ、山ノ神、
あ、山ノ神、

○孔子ノ言ヲ
顔回トイヒシ人ヲ
ノイハシキ事ニ
テト云フ

幸ふに古徳の志誠ありしにあらんは
〜信〜つ〜切〜し〜女〜信〜
多あり極方と可貴〜よ〜
是〜も〜佛の徳〜
是の〜も〜顔子に陋巷〜
の〜一〜軌〜も〜保〜ふ〜
す〜も〜
は〜
と〜
一〜
放〜
一〜

水の〜
衣被潤な〜
花〜
乃〜
と〜
只傾城の家〜
と〜
は〜
り〜
世ふ〜
り〜

あはれなる御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて

まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて

まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて
まことの御心にて

まことの御心にて

まことの御心にて

玄説

1842
The original
manuscript
is in
the
possession
of
the
British
Library
London
MS. A. 9. 2. 11. 11. 11. 11.

一、此の書は、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

編纂此の稿をのぞく紙書より
 何れの人か書かざりし人か
 歎くはしと云ふ持たざるは
 報いしと云ふ我子の死を
 言佛道中へ年々清く
 なるべしとのほろひの
 そののたふさふさの
 りもはるる色もあつた
 屋敷方もたまたま
 の拾得の白くあつた
 ありとあるもたまたま
 耳をもちも飯のくら
 けもたつた

の編纂此の稿をのぞく紙書より
 何れの人か書かざりし人か
 歎くはしと云ふ持たざるは
 報いしと云ふ我子の死を
 言佛道中へ年々清く
 なるべしとのほろひの
 そののたふさふさの
 りもはるる色もあつた
 屋敷方もたまたま
 の拾得の白くあつた
 ありとあるもたまたま
 耳をもちも飯のくら
 けもたつた

○我々の世に
 のほろひと
 言ふは
 言ふは

Handwritten text in cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is dense and fills most of the page.

Handwritten characters, possibly a signature or a specific name, located in the middle of the page.

Small handwritten text or a note, possibly a date or a reference, located below the signature.

Small handwritten text or a note at the top of the page, possibly a header or a reference.

Main body of handwritten text in cursive script, continuing from the top of the page.

あつた今官邸の同地ある

物ころり川移し松葉も

ゆえれ里も移りし松葉も

の一同にせらるる川に流す

松も我とあれしと我は

かよのちもあつて風も

雪もあつてあつた梅の色

あつた月もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

あつた松葉もあつた松葉も

弘葉は松風サ
ヤミヲ好ム人
西野ハ陶師ガ
ゆ甲後表にちれ
西ノちちに料理
りちちちちちち
人サ

WESTPOT
WESTPOT
WESTPOT
WESTPOT

前二
生

くひもあつち十の馳せり
きし日れ用ふり
乃ほまゝあつち
らさ可なちゆあのみち
類よまの二と半し
是のよあつち
まの

寛保二年

断酒辭

○李杜李白杜甫
酒のあつち
つん

しより。李杜は酒場なる
あつち

○南郭の竿

齊宣王が竿ヲ
好むヲテ竿ノ各
之百人ニ命ヲ下
テタリ然レニ南郭
先生ト云ク竿ヲ
吹クイテテラスセ
此ニ言ハ内ベテリ
其復宣王カクスニ
コニコシラレタル
先生ニゲゼシタリ



長四天子
二十六年

て。南郭の竿と云ふは
竿をちりしあつち衆人皆酒
世は鼻あつち
北と云ふ
あつち
あり一日の飲と
けあつち
タアか
夏のあつち

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style. At the top right, there are some faint, illegible markings that appear to be a date or a reference number, possibly "1840" or similar.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the previous page. The text is written in a fluid, connected style. At the top right, there are some faint, illegible markings that appear to be a date or a reference number, possibly "1840" or similar.

皆言和元辛酉年九月

東都少府少監

